

貝類資源調査結果

貝類資源の変化を把握するために1986年（昭和61年）から漁場内の定点において貝類の分布密度調査を偶数月に実施しています。

東京湾におけるアサリ漁獲量は、2020年に11トンまで減少した後、盤洲、富津では漁獲がみられたのに対し、北部ではほとんど漁獲されていません（図1）。

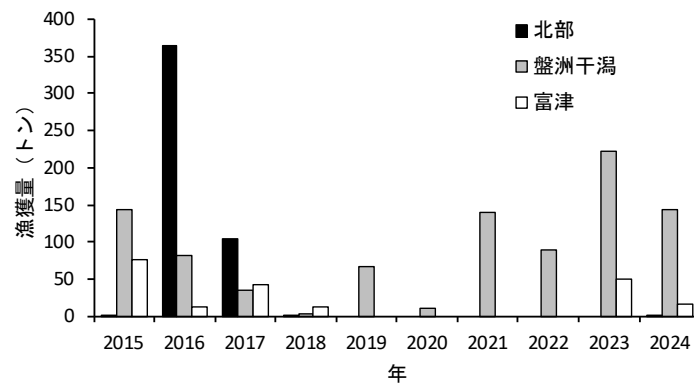


図1 海域別アサリ漁獲量の経年変化

貝類資源調査によると、2025年市川側沖合で青潮により減耗がみられましたが（10月）、12月にはほぼ全域で増加しました（図2）。

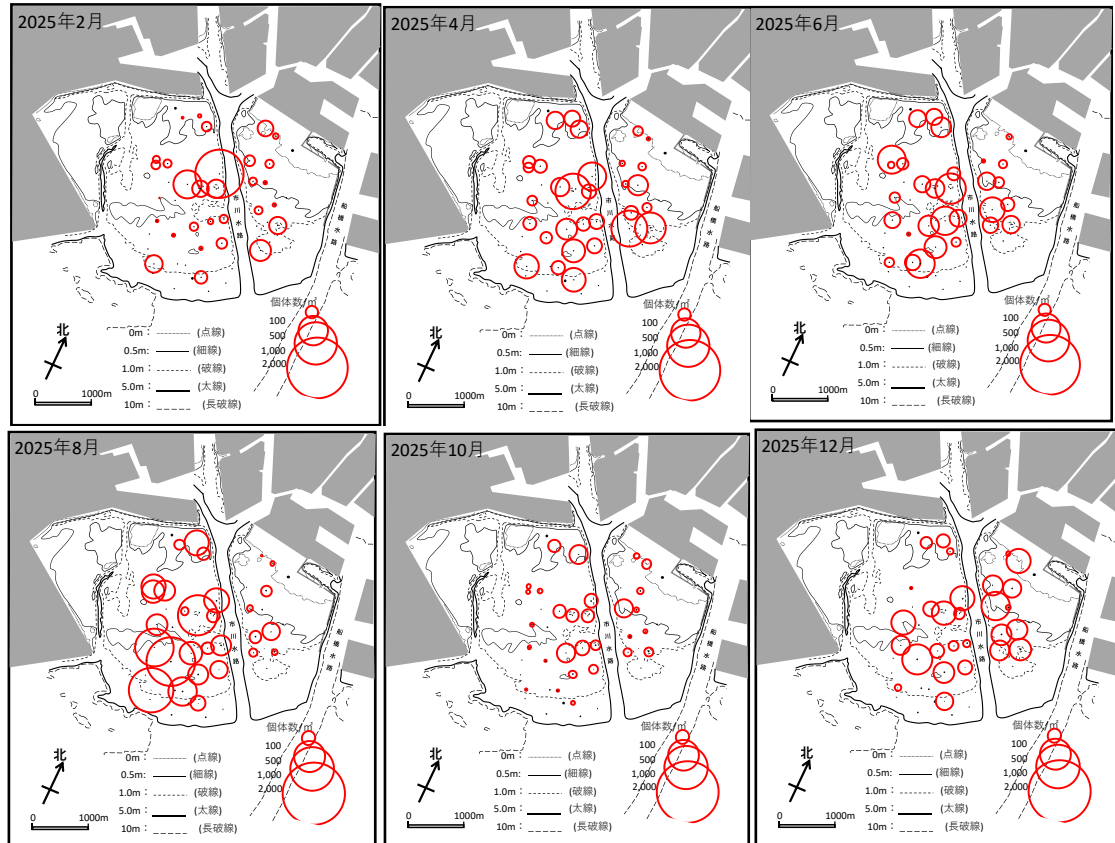


図2 貝類資源調査によるアサリ分布密度

貝類資源調査によるアサリ平均分布密度の推移をみると、2017年頃までは秋冬季の減耗が明瞭でしたが、殻長16 mm以上の割合が高い傾向でした(漁獲につながる)。一方、2020年以降は青潮の影響を強く受け、殻長16 mm以下の小型貝のみの組成となりました。ただし、2024、2025年は、著しい青潮の影響を受けなかったため、稚貝は減耗せず、殻長16 mm以上の割合も増加しています(図3)。

一方、ホンビノスガイは、2020年以降、1桁台~21個/m²と低調に推移しましたが、2024年以降20個/m²以上の調査月も見られるようになり、殻長30 mm以上の個体も見られるようになりました(図4)。ただし、漁場は三番瀬外が主に利用されています。

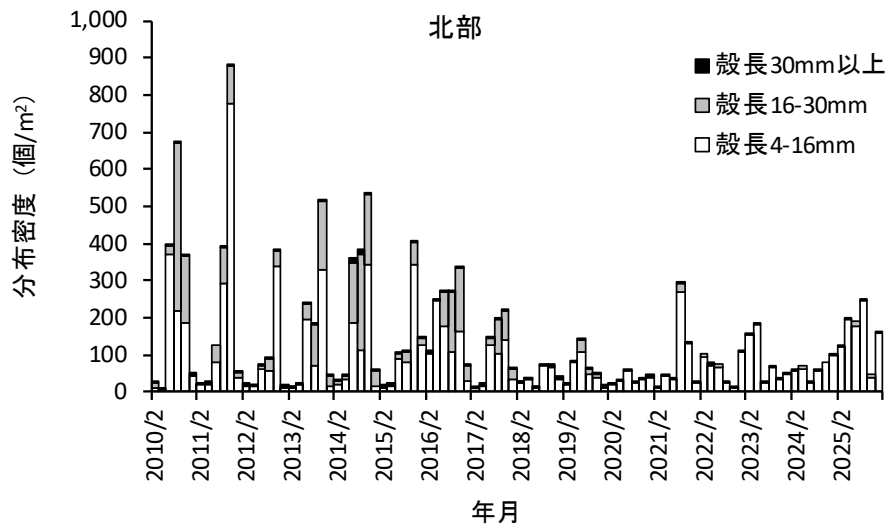


図3 2010年以降のアサリ分布密度の推移

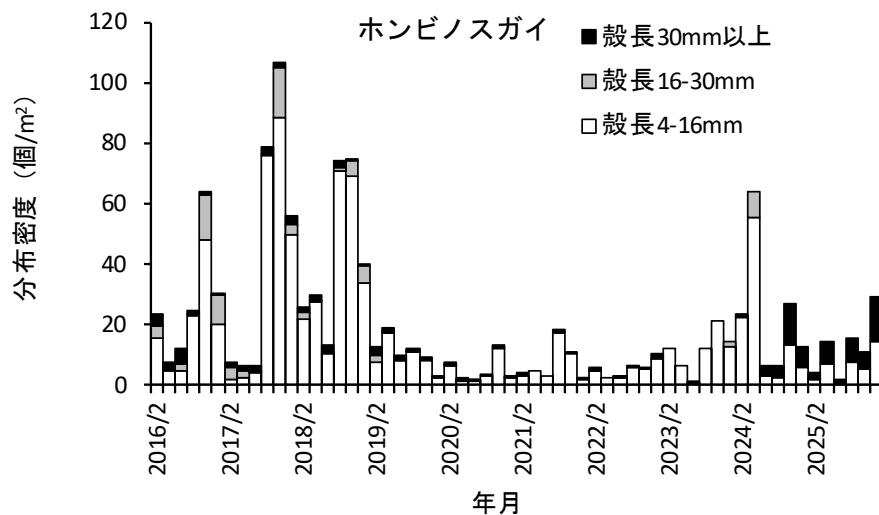


図4 最近10年間のホンビノスガイ分布密度の推移